

# 「資本と信用」プロジェクト研究報告

## 1. 目的・活動内容

「資本と信用」の題の下、立教内外の研究者を集め、資本主義の揺籃期の経済学を、主に18世紀フランスの経済学者に集中して取り上げた。18世紀は、とりわけ啓蒙主義に裏打ちされた経済学の成立期と言えるが、科学的な取組みはもちろんのこと、経済学に社会的・政治的・倫理的な要素も必須であることは、ポリティカル・エコノミーという用語に込められている。社会制度は、封建制度が色濃く残る封建遺制から資本主義への移行期であり、とりわけ、「資本」と「信用」という、2つの切り口から、揺籃期の資本主義経済の有り様に迫った。2017年度は立教内外の研究者を集め、資本主義の揺籃期に焦点をあて、封建遺制が残る近代初期から18世紀全般にわたる経済の変遷、並びにその間のフランスにおける経済理論の発展を取り上げた。

表 2017年度「資本と信用」研究会一覧

No.	項目	内容
1	開催日	2017年7月7日(金)
	タイトル	グラスランボードの価値論争—18世紀後半のフランスにおけるフィジオクラシーへの反発—
	講師(所属)	山本 英子(早稲田大学大学院博士課程)
	参加人数	6人
2	開催日	2017年10月7日(土)
	タイトル	奢侈論争とフランス経済学—奢侈か節約か—
	講師(所属)	米田 昇平(下関市立大学教授)
	参加人数	12人
3	開催日	2017年10月31日(火)
	タイトル	ケネー「経済表」について
	講師(所属)	Van Den Berg, Richard(ロンドン・キングストン大学)
	参加人数	200人
4	開催日	2017年11月2日(木)
	タイトル	18世紀のフランス経済学者—とりわけカンティロンについて
	講師(所属)	Van Den Berg, Richard(ロンドン・キングストン大学)
	参加人数	14人
5	開催日	2017年11月8日(水)
	タイトル	18世紀フランスの資本概念について—ケネーとチュルゴ
	講師(所属)	Van Den Berg, Richard(ロンドン・キングストン大学)
	参加人数	20人

## 2. 研究会概要

### ■第1回 研究会

開催日：2017年7月7日（金）

会場：立教大学 池袋キャンパス 12号館4階共同研究室

報告者：山本 英子（早稲田大学大学院政治経済研究科博士後期課程）

概要：早稲田大学大学院の山本英子氏に、グラスラン、ボードーはじめ、フランス効用理論の魁について報告を受けた。グラスランは、当時のチュルゴの価値理論に大きな影響を与えたという。さらには、オーストリアのカール・メンガーにもその理論的基礎を提供した。それは、メンガー文庫（一橋大学所蔵）の彼の書き込みから知ることができる

### ■第2回 研究会

開催日：2017年10月7日（土）

会場：立教大学 池袋キャンパス 12号館4階共同研究室

報告者：米田 昇平（下関市立大学教授）

概要：第2回目は、下関市立大学の米田昇平氏が、「奢侈」と「欲望」の観点から、フランスにおける経済学の成立について報告した。ボワギルベールの消費の理論、マンデビルによる私利の追求の肯定を経た経済学が、当時の奢侈的消費と欲望の関係に注目して、どのようなヴィジョンを展開したか、について、18世紀中葉以降のフランスの奢侈論争に焦点を絞り、啓蒙の人間像や社会像との関係にも留意しつつ、この論争と経済学との関係に光を当てることで明らかにされた。奢侈か節約かを論点とする奢侈論争の坩堝に鍛えられて、生産（節約・資本蓄積）と消費（奢侈・有効需要）にかかわる経済学の基幹的な認識がどのように形成されていくか、その一端を明らかにし、経済学の形成史上の知られざるコンテクストが浮き彫りにされた。

### ■第3回 研究会

開催日：2017年10月31日（火）

会場：立教大学 池袋キャンパス 5号館5122

報告者：Richard Van Den Berg（イギリス・キングストン大学教授）

概要：第3回は、ケネーの『経済表』を中心にした再生産理論について、学生向けの入門的解説から、ケネー自身の抱える問題点まで、詳細な報告・発表がなされた。ケネーの『経済表』における数値例では、その技術的情報が欠落するために、なぜ農業だけが生産的か、について決定的なことは何も言えない。いわゆる“bon prix（良価）”の水準についてであるが、いち早くその問題に解決の光を当てたのは、同時代人の、イズナールであった。彼は、価額を価格と数量に分解することで、ケネーの投げかけた困難な問いに答えたのである。

#### ■第4回 研究会

開催日：2017年11月2日（木）

会場：立教大学 池袋キャンパス 12号館4階共同研究室

報告者：Richard Van Den Berg（イギリス・キングストン大学教授）

概要：第4回は、18世紀初頭に活躍するカンティロンについて、である。カンティロンは、アイルランド系商人の息子で、フランスに渡り、そこでジョン・ローの知遇を得る。ローのバブル的な金融政策には懐疑的であったが、実際にはそのおかげで、大もうけした。ベルグ教授は、カンティロンの業績の中でも、とりわけ「企業者精神」論に注目し、その先駆性を強調した。

#### ■第5回 研究会

開催日：2017年11月8日（水）

会場：立教大学 池袋キャンパス マキムホール202

報告者：Richard Van Den Berg（イギリス・キングストン大学教授）

概要：第5回目に取り上げたチュルゴは、18世紀フランスの経済学者群像の最後を飾るに相応し、ケネーに勝るとも劣らない、優れた経済学者であった。首相まで務めた政治家でもあったので、多忙を極め、ノートやパンフレットの類いでその俊英ぶりを偲ぶことはできるが、まとまった書籍としては『富の形成と分配にかんする考察』（1766年）を別にして、一冊も無い。それにもかかわらず、どちらかといえば短編に属するこの一冊で、彼の名を不朽にした主な理由は、アダム・スミス以降の経済学のほとんどがこの書物に凝縮されている、といっても過言ではないからである。貨幣→実物→貨幣、と繋がる連鎖として資本を初めて定義したのはチュルゴであり、部門間の収益性の階層性を超えた均等化に着目したのも、市場で働く重力の中心として自然価格を捉え、自由化による経済の効率性をあくまで追求したのも、チュルゴに他ならない。

担当：黒木龍三（本学経済学部教授）